



デフアスリートを ささえる

競技別手話言語通訳ガイド

[サッカー編]

Football



ごあいさつ

全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長
小椋 武夫



スポーツ庁は「する・みる・ささえる」といった多様なスポーツライフを通じて、スポーツ参画人口の拡大を目指しています。アスリートのプレーを「みる」、ボランティアの「ささえる」活動を通して、「する」スポーツへの興味が喚起され行動へとつながることが期待されており、きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加と共生社会の実現にも通じる取組になります。

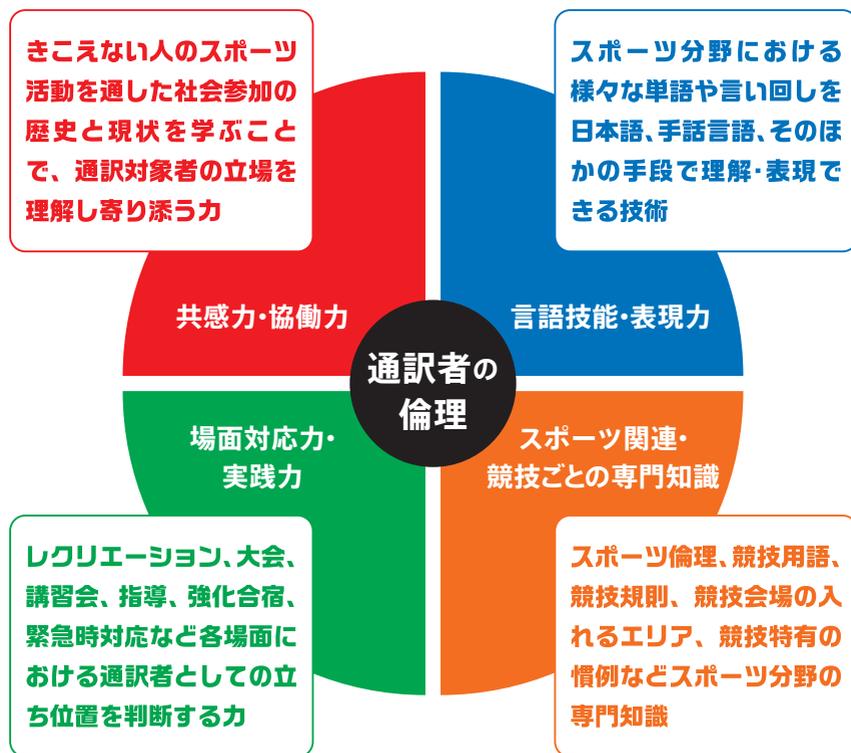
きこえない人がアスリートのプレーをみるためには、スポーツ施設の情報アクセシビリティ向上、放送の字幕・手話言語付与などの整備が進められています。

一方、きこえないアスリート(デフアスリート)がスポーツをするにあたっては、スポーツ関係者によるきこえないことや手話言語への理解促進とともに、デフアスリートのスポーツ活動をささえる日本手話言語通訳者の育成が重要になっています。

本委員会が受託しました、スポーツ庁の令和2年度「障害者スポーツ推進プロジェクト事業」は、スポーツに精通した手話言語通訳者の育成を主な目的としています。そこで、スポーツ分野で通訳者が準備すべき内容の基礎として、きこえない人のスポーツ活動の歴史と現状を紹介するパンフレット、サッカー競技と自転車競技を解説するパンフレット、開会式や表彰式で歌われる国歌の手話言語試行版パンフレットと動画を製作しました。スポーツ活動の現場で通訳を行う方々の知識と技術の向上にこれらの手引きが役立つことを願っています。

スポーツ分野で 通訳するための準備

きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加を支える手話言語通訳者が、通訳者としての倫理観を備えた上で準備しておくべき知識と技術を、「共感力・協働力」、「言語技能・表現力」、「場面对応力、実践力」、「スポーツ関連・競技ごとの専門知識」の4テーマに整理しました。



このガイドブックでは特にサッカー競技に必要な知識を紹介します。

サッカーの基礎知識

サッカーは世界中で人々に楽しまれています。4年に1度世界の頂点を目指して争われるワールドカップを一度は見たことがある方も多いでしょう。

サッカーの基本的なルールは以下の通りです

1 ボールを扱う時に
手を使ってはいけない

2 ボールをゴールに
入れたら1点

3 相手より多く得点を
取った方が勝ち

1 ▶▶▶ [人数について]

1チーム11人(ゴールキーパー1名を含む)となります。選手交代は3~6名までとし、交代要員として3名~12名の登録ができます。交代枠を使い切った後は、交代をしたくても補充はできないので退場者が出た場合は11人より少ない人数で戦わなければなりません(選手交代の人数は試合前に確認します)。

2 ▶▶▶ [フィールドについて]

フィールドの大きさは標準では68m×105mです。とても広く選手は常に走りまわるので体力が必要です。



3 ▶▶▶ [ユニフォームについて]

接触プレーが多いので、自分自身や他の競技者にとって危ない用具を身につけてはいけません。ただし、主審が安全であると認めれば眼鏡やヘッドギアをつけることはできます。

4 ▶▶▶ [試合時間について]

試合は前後半に分けられ、各45分ずつとなります。前半終了後、休憩時間(インターバル)は15分以内と決められています。また後半の試合終了後、アディショナルタイムが加算され試合が続行されることがあります。

5 ▶▶▶ [VARとは?]

「VAR」とは「ビデオアシスタントレフェリー」の略称です。最近ではサッカーに限らず、多くのスポーツで「VAR」を活用しています。

別の場所で映像を見ながらフィールドの審判員をサポートする審判員のことです。サッカーの場合、どの試合でもできるわけではなく、国際サッカー評議会(IFAB:サッカーの競技規則を唯一、制定・改定できる組織)の承認を受けた組織、スタジアム、審判員でなければ使用できません。

6 ▶▶▶ [フットサルについて]

サッカーに似た競技にフットサルがあります。サッカーと似ていながらサッカーにはない大きな特徴があります。

フットサルはサッカーよりコートもボールも小さく、屋内で開催されることも多いです。人数も1チーム5人となり、ポジション名も異なります。

また試合時間は1ピリオド20分、1度交代してベンチに入った選手でも復帰することができます。接触プレーが反則となるため安全にプレーができるので年齢や性別に関係なく多くの人々を引き付ける魅力があります。

〈フットサルについての詳細はこちら〉

フットサル | ルールを知ろう! | JFA | 日本サッカー協会 ▶ <https://www.jfa.jp/rule/futsal.html>

ろう者とサッカー

きこえる人の場合は、チームメイト同士、声で指示をだしたりコミュニケーションを取りますが、デフサッカーの場合は手話言語やアイコンタクトでコミュニケーションを取っています。

基本的なルールはきこえる人のサッカーと同様です。大きな違いは審判です。主審は笛とフラッグ（右写真）両方を使用します。国際的な試合ではさらに両ゴール裏に1人ずつ、合計5人のフラッグを持った審判員が、プレーの停止等の合図を様々な方向から伝えます。

デフサッカーはきこえる世界で育った選手、ろうの世界で育った選手など様々ですが、近年ではきこえる世界で育った選手が増えています。そのため、試合中補聴器を取るとコミュニケーションを取るのが難しくなるため、手話言語を覚えていく選手が多い状況です。ろう学校の生徒数ではサッカー部を作るほどの人数がないため、それぞれ地域のサッカークラブに所属しながら日々練習を行っています。全国でも選手数が多く、若い選手が日本代表を夢見て各地で活躍しています。国内では全国ろうあ者体育大会でサッカー競技（これまで39回開催）が開催されています。2017年に開催された第23回夏季デフリンピック競技大会（トルコ・サムスン）では、男子チームが出場し、世界の強豪を相手に予選リーグ初勝利を挙げました。



デフサッカーの主な大会

国際大会

夏季デフリンピック（サッカー）

1924年のパリ大会から正式競技として採用されています。2017年のサムスン大会では、日本を含む17カ国が参加、男子272名、女子115名の選手が参加しています。

冬季デフリンピック（フットサル）

2019年に開催されたICSD（国際ろう者スポーツ委員会）の総会で、2023年開催予定の大会（開催地未定）から、冬季大会の正式競技として開催されることが決まりました。

アジア太平洋ろう者競技大会（サッカー・フットサル）

4年に1度開催。デフリンピック競技大会のアジア予選大会としても位置づけられています。前回第9回大会は2019年に香港で開催される予定でしたが、現地情勢により中止になりました。

世界ろう者サッカー選手権大会

ICSD公認大会で、4年に1度開催。「デフサッカーワールドカップ」とも呼ばれています。前は2016年にイタリアで第3回大会が開催され、日本からは男子が出場し11位でした。

アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会

世界ろう者サッカー選手権大会のアジア太平洋地域の予選大会となります。前回大会は2018年に韓国で開催され、日本チームは男子準優勝、女子は優勝しました。

世界ろう者フットサル選手権大会

4年に1度開催。前回の第4回大会（2019年スイス）は男子14カ国中10位、女子12カ国中次回5位の成績を残しました。今回は2023年11月にブラジルで開催されることが決まりました。

アジア太平洋ろう者フットサル選手権大会

世界ろう者フットサル選手権大会のアジア太平洋地域の予選大会で、上位4カ国が世界選手権に出場する権利が得られます。前は2019年2月にタイで開催され、日本チーム男子は準優勝、女子は優勝しました。

国内大会

〈全日本ろうあ連盟主催〉

全国ろうあ者体育大会（サッカー）

夏季体育大会の中でも人気競技です。ブロックごとに選出された都道府県ごとの8チームが優勝を目指して争います。2021年度の兵庫大会で第40回となります。

〈日本ろう者サッカー協会主催〉

全日本ろう者サッカー選手権大会

4ブロック地区代表（北海道、東日本、西日本、九州）チームが優勝を目指してたたかう大会です。日本代表を選出するための重要な大会でもあり、毎年10月～11月に、4ブロック持ち回りで開催しております。

全日本ろう者フットサル選手権大会

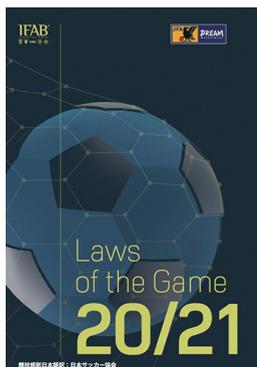
毎年10月～12月に、4ブロック持ち回りで開催しています。ろう者のなかでフットサルの普及が急激に広まり、ろう者サッカー協会会員からの要望も多くなったのがきっかけで、北海道ブロックで開催され、その後全国大会となりました。

サッカーにおける情報保障①

サッカーはメジャーなスポーツなため、なんとなくルールを知っているという人は多いですが、競技規則は国際サッカー評議会(IFAB)によって制定されており、日本サッカー協会が日本語に翻訳・解説を入れたものが毎年更新されています。デフサッカーもルールはこれに準じています。

競技規則 | 日本サッカー協会 ▶ <https://www.jfa.jp/laws/>

この規則集は200ページを超える膨大な量で、毎年改正をされています。手話言語通訳者が全てを覚えることは難しいですが、このガイドブックの他、最低限どのようなルールで試合が行なわれているのかは事前に知っておいた方が良いでしょう。



Point!

ポイント

- 様々な環境で育った選手がいるため、主なコミュニケーション手段も様々です。専門用語は手話言語の表現にこだわりすぎず、場合によっては「指文字でそのまま伝える」、「事前に表現を確認する」ことが重要です。
- 「誰に対して(コーチ・選手)」、「どんな場面で(練習・試合・ミーティング)」、「どのような通訳(技術指導・戦術会議)」をしているかによって表現を変える必要があります。一つの表現・方法に固執せず、柔軟に選択肢を持つことが大事です。
- あえて「指文字で日本語そのまま」の情報を表出することにより、きこえない選手や指導者がイメージできる場合もあります。その場面で手話言語通訳者が一番ルールを分かっていない場合もありますので、あいまいな知識で解釈して表現をすることの危険性も十分理解してください。

サッカーにおける情報保障②

サッカーは団体競技です。地域ではきこえるチームにきこえない選手が参加する場合がありますが、きこえない選手が集まってチームを作っていることもあります。様々な状況が考えられますが、手話言語通訳が必要な場面は大きく分けて下記のパターンが考えられます。

手話言語通訳者が取るべき行動

いずれの事例もこのガイドブックに書いていることだけが正解ではありません。状況やデフ選手・指導者の要望に応じて行動をするようにしてください。

きこえるチームにデフ選手がいる場合

case 1

練習中に指導者が全体に向けて大声で指導しているが、選手は練習に集中しているため、止められない。

プレーが止まった時や休憩時にこのような指導があったと事後通訳することもあります。

case 2

デフ選手が何か指導者に聞いたような表情をしているが指導者が気づいていない。

通訳者が選手に話しかけて指導者とのコミュニケーションを促すことも求められます。

デフチームにきこえる指導者がいる場合

case 1

選手が動きに集中して指導者の方を向かない。

一旦プレーを止めてから指導するように伝えてください。

case 2

指導者が選手に向かって話を始めてしまった。

事前に指導者と十分打ち合わせをして、指導のタイミングを確認しておくことが重要です。

サッカーにおける情報保障②

デフチーム同士の試合できこえる審判員がいる場合(主に試合)

case 1

試合開始・再開時等の確認で細かなコミュニケーションが必要になった。



審判からの情報をきこえない指導者・選手に伝えられるよう、審判員に必要になったら手話言語通訳を呼んでもらうよう声をかけておくのが良いでしょう。

デフチームならではの指導方法

指導者・選手がろう者同士の場合、目が合った時は瞬時に手話言語で指導することはあります。一方、きこえる指導者が手話言語通訳を介して伝えるとリアルタイムで伝えることは難しく、あまり現実的ではありません。十分に打ち合わせるなど、工夫が必要です。

プレー中に指示したり、掛け声をするを「シンクロコーチング」と言いますが、デフサッカーの場合はプレーを一旦止めて、その場で説明をするという「フリーズコーチング」という方法が適しています。



▶時間はかかりますが、皆を注目させやすく伝達しやすいというメリットがあります。

指導者講習会での手話言語通訳

Column

日本障がい者サッカー連盟(JIFF)による手話通訳費用補助制度

JIFFでは、きこえない人・きこえにくい人がサッカーやフットサルの指導者講習会へ参加できるようにするため、講習会の主催者に対する手話通訳者費用を補助する制度を2018年から設けています。きこえない人が手話通訳者を連れていくのではなく、「主催者側で手話通訳を手配する」ことを補助することで、意識付けを持たせる役割も持たせています。障害者があらゆる場面でスポーツに参加しやすくするという意味でもとても良い事例です。制度の資金は寄付金で賄われています。

<https://www.jiff.football/about/shuwa/>

サッカーにおける手話言語通訳のポイント①

福祉現場との違い

デフサッカーに限りませんが、現場での手話言語通訳は広い範囲で飛び交う声や音、情報を常にキャッチして、臨機応変に動ける力が必要です。あらかじめ資料があることはほとんどありませんし、通訳者自身が能動的に動いて指導者・選手から情報を引き出し、相手に伝えることも重要です。

とにかく動く

サッカーは使用するフィールドが広いので、通訳が必要とされる場所も広範囲に及びます。固定された場所ではなく、手話言語通訳者自身があらかじめ動きやすい服装をし、現場のニーズに応じて素早く動くことが大事です。

しかし、試合中は原則としてテクニカルエリアに行けるのは1人と決まっており、手話言語通訳者(情報保障者)だからといって勝手に同行することはできません。どこまで通訳に入るのか、その行動範囲については十分に打ち合わせしてください。

ミーティングとフィールドでの話し方

ミーティングでは「戦術」や戦略的な話についてある程度の時間をかけて行います。サッカーの専門用語や技術の名前が頻出しますので、しっかり伝えるようにしましょう。聞き漏らした場合は再確認をすることも重要です。

一方、フィールド上での指導はシンプルな言葉を投げかけることが多く、サッカーのテクニックもポイントで伝えることが多く、長々と話すことはありません。通訳の際はスピードとタイミングが大事になります。指導者をよく観察して、必要であれば確認を取りましょう。



サッカーにおける 手話言語通訳のポイント②

立ち位置は？

基本的にはよく発言する(きこえる)指導者のそばにいて、必要に応じて選手に向けて手話言語通訳を行います。

「フリーズコーチング」で指導者がフィールド内に入って動きながら指導する時は、遅れることなく通訳者も一緒に動き、選手の視界に入るようなポジション取りをしてください。しかし、指導者の近くばかりにいて選手から遠すぎても手話言語通訳が読み取れない場合もありますので、適度な距離感を予めデフ選手と確認しておくもの大事です。

〈位置を決める要素〉

コーチの口、デモンストレーション、手話通訳、全部が見えてどれを見るか選べる位置。場面・状況によってベストな位置はどこか。

指導者や選手に合わせる

指導者が選手にルールやテクニック、戦術の指導をする際、難しい言葉を使う人、シンプルな言葉で伝える人など様々な人がいます。一方、難しい言葉を理解している選手やそうでない選手もいます。一概にこのようにするべき、という正解はないのですが、スポーツの現場(特に指導現場)では指導者と選手が主役ですので、手話言語通訳者の通訳が不十分なために情報が伝わらない、行き違いが起こると指導の効果がなくなります。

繰り返しになりますが、指文字でそのまま表出する、または手話言語の単語の表現にこだわらず図象的に表現をする等、工夫をすることが必要です。

伝わっているか確認を

いつも手話言語通訳者がいる状況とは限らないので、指導者・選手のコミュニケーションスキルを上げていくためにも、手話言語通訳者はその場でしっかり伝わっているかどうか確認をしていくことも求められます。



【オフサイド】について

『オフサイド』の手話

指を開いた左手を追い抜いて、右手人差し指を斜め前に出す。

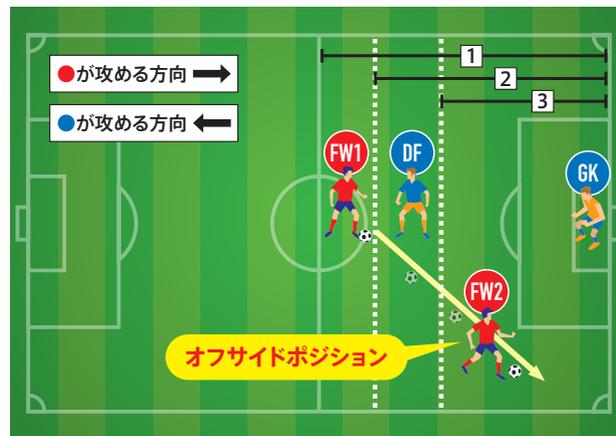


(「オフサイド」については戦略も絡み非常に複雑なので、当ガイドブックでは概要だけ説明します。)

オフサイドは、攻撃側のチームが得点をするために、守備側のチームのフィールド内で待ち伏せを防ぐために定められたルールです。

「ボールを持っている人が前方にボールを蹴った瞬間に、パスを受ける選手がオフサイドポジションにいたかどうか」でオフサイドになるかどうか判断されます。そのポジションにいることだけでは反則にならず、「利益を得た」場合になります。

※オフサイドポジションにいること自体は違反ではありません。



- 攻撃側競技者(FW)が、ボールに触れるあるいはプレーした瞬間に、味方競技者(MF)が、
- 1 守備側チームのフィールド内
 - 2 ボールより守備側チームのゴールラインに近く
 - 3 後方から2人目の守備側競技者よりゴールラインに近くにいることです。

〈詳細は下記のページを参照してください〉

サッカー | ルールを知ろう! | JFA | 日本サッカー協会「オフサイドについて」▶ <https://www.jfa.jp/rule/>

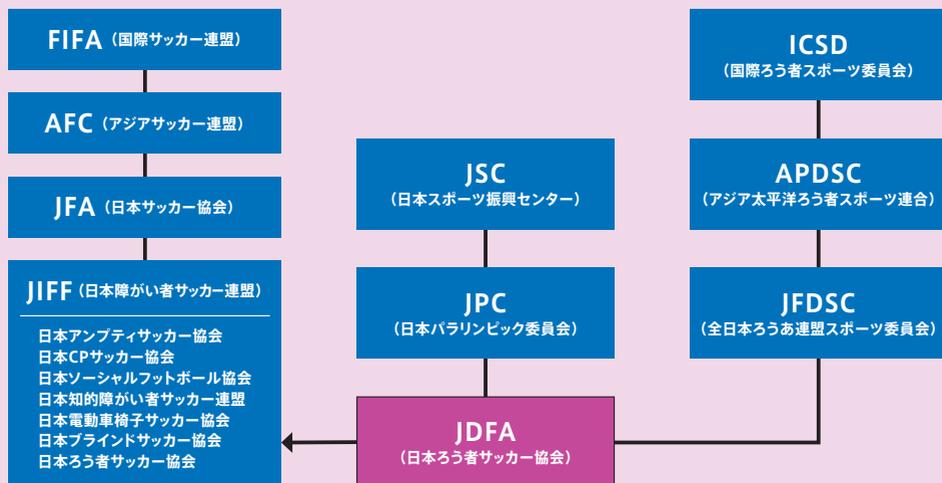
サッカー用語

オフENS	攻めている状態、攻撃側
ディフェンス	敵から自軍のゴールを守り、敵に得点されることを防ぐ行為
サイドバック	ポジションの名前。4バック又は5バックの左右両サイドに位置するディフェンダーのこと
ボランチ	ポジションの名前。中盤の底でディフェンダーの前に位置する、守備的ミッドフィルダーのポジション。チームの「運転」を担う「舵取り」である
ミッドフィルダー	ポジションの名前。サッカーフィールドの中間に位置する
ファール	選手による反則のうち、主審がサッカー競技規則第12条に反すると判断したもの（例：ハンドリング、キッキング、シミュレーション）



ベンチ	スターティングメンバーではない選手
コーチ	監督の意図やサッカー哲学をもとに、選手たちの技術的な指導やマネジメントをする主な仕事。ゴールキーパーやフィジカルなど専門のコーチも存在する
アディショナルタイム	競技者の交代、負傷者のアピールや怪我の程度の判断、負傷者の搬出などにより空費された時間。試合の前後半それぞれの規定試合時間の後に追加する
フリーキック	試合中に何らかのファウル、不正行為が行われた時、反則を受けた側が反則を受けた地点から相手の妨害を受けない形でキックする事によってプレーを再開するルール
ペナルティキック	ペナルティーエリア内でファウルが犯された時、キッカーとゴールキーパーの1対1の状態で行われる。ゴールから10ヤード（約9.15メートル）離れた地点にボールを置いて行われる
スローイン	ボールを手で投げてゲームを再開するルール。タッチラインからボールが出たときに最後にボールに触れた選手の相手チームがボールを投げられる。
コーナーキック	守備側の選手が最後に触れたボールが自陣側のゴールラインから外に出て、かつ得点とならなかった場合に、コーナーアークからのキックによってプレーを再開させるルール
ゴールキック	攻撃側の選手が最後に触れたボールが相手側のゴールラインから外に出て、かつ得点とならなかった場合に、ゴールエリア内からのキックによって試合を再開させるルール
オウンゴール	味方が自陣のゴールにボールを運んでしまい失点すること

[組織]



一般社団法人日本ろう者サッカー協会

1998年4月に設立デフサッカー・フットサルの普及、発展及び競技力の向上に関する事業を行い、聴覚障がい者のスポーツ文化の振興及び心身の健全な発達に寄与するとともに、国内及び国際社会における交流に貢献しています。全国を4ブロック(北海道、東日本、西日本、九州)に分けて活動しています。「普及施策の推進」「日本代表の強化」「育成環境の充実」「組織基盤の強化」の4つのミッションをかかげています。

[編集協力]

一般社団法人日本ろう者サッカー協会 <https://jdfa.jp/>

デフアスリートをささえる

競技別手話言語通訳ガイド [サッカー編]

発行日 2021年3月31日

発行 一般財団法人全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会

TEL : 03-3268-8847

FAX : 03-3267-3445

メール: jfd-sc@jfd.or.jp

URL : <https://www.jfd.or.jp/sc/>

このガイドブックは、令和2年度スポーツ庁委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）」（スポーツに精通した手話通訳者の育成）により作成しました。

[参考情報]

JDFA(日本ろう者サッカー協会)
<https://jdfa.jp/>

JFA(日本サッカー協会)
<http://www.jfa.jp/>

JIFF(日本障がい者サッカー連盟)
<https://www.jiff.football/>

全日本ろうあ連盟スポーツ委員会
<https://www.jfd.or.jp/sc/>